

「山を動かす信仰」

イザヤ書 第40章27節～31節  
マタイによる福音書 第17章14節～21節

説教 村上修平牧師

主イエスは、「もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって『ここからあそこに移れ』と言えば、移るであろう。このように、あなたがたにできない事は、何もないであろう」（マタイによる福音書17章20節）と言われました。からし種は直径約一ミリの地上で一番小さな種です。また、ユダヤ人は、何か不可能を可能にする事を「山を動かす」と表現するそうです。つまり、神様を信じるならば、あなたがたに不可能な事は何もないと、教えて下さったのです。これは素晴らしい約束です。

けれども、私たちはこの素晴らしい約束を日々の生活の中で生かしているでしょうか。むしろ、私たちは目の前にある「山」の方ばかり見て、こんな大きな山を動かすなんて私にできるはずがないと、最初から諦めてしまっているのではないかと思います。実は、主イエスの弟子達もそうでした。マタイによる福音書17章には、弟子達のある失敗談が記されています。

あるてんかんの子が、火の中や水の中に何度も倒れるほどひどい発作を起こして苦しんでいました。ここで「てんかん」と訳された言葉は、《月に打たれた》という意味があり、今日で言う病気の「てんかん」とは区別している聖書学者が多いようです。当時、天体崇拜が盛んでしたが、聖書はこのような偶像崇拜を悪霊の仕業であると述べています。つまり、この子は悪霊の影響を受けて苦しんでいたと考えられます。父親は子を助けたい一心で、主イエスの弟子達のところに連れてきました。しかし、弟子達はこの子を治すことができなかつたのです。弟子達もこんなひどい症状は初めてだったのかもしれません。とても私の手には負えないと、尻込みしたのでしょう。

主イエスは、弟子達に向かって言われました。「ああ、なんという不信仰な、曲った時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。…その子をここに、わたしのところに連れてきなさい。」（17節）一体いつまで待ったら、私を本気で信じて私に頼るようになるのかと、主イエスは深く嘆かれたのです。

私は神学生の頃、金沢教会で夏期伝道実習をさせて頂きました。実習中、病院に入院されている方の問安によく連れて行ってもらいました。その時私は、病気の母を側で為す術もなく見守っ

た時のことが思い起こされて、病院に行くといつも重苦しい気持ちになっていました。しかし、病院の帰り道、牧師先生との会話の中で、私たちはイエス様の手伝いをしているだけであることを教えられました。自分一人で全ての病人や苦しむ人を肩に負う必要はないのです。主が、私たちの痛みや病気、どんな手に負えない問題や罪も全て背負って、私たちを助けて下さるからです。私たちのなすべきことは、人々を主イエスのところに連れてくることです。

今でも問安に行く時は、これは主イエスの手伝いであることを思い起こしています。祈る時も御言葉を読む時も、主が私の手や言葉を通して、その方に触れて下さることを信じて、祈りながら出かけて行きます。心強いのは、教会の祈りの中で兄弟姉妹と共に遣わされることです。私たちは一人ではない、主が共におられることが身にしみて分かります。

主イエスは、「あなたがたの信仰が足りないからである」と弟子達を叱られました。彼らの信仰は、からし種にも満たなかつたのでしょう。それでも、主イエスは、「信仰が足りない」と言われたのであって、信仰が無いとまでは言われませんでした。私たちのあるかないか分からないような小さな信仰を主イエスは認めて、そのような私たちに、主イエスの手伝いまでさせて下さるのです。主イエスの私たちに對する信頼は何と大きいことでしょうか。

だから、失敗してもそこで諦めずに、主のもとに行きましょう。弟子達は失敗した後、ひそかに主イエスのもとに行き、恥もプライドも投げ捨てて、「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかつたのですか」（19節）と尋ねました。主の前に、自分の足りなさを認め、へりくだること、これも大切な祈りの姿勢です。信仰は一粒のからし種のように、成長するために水や肥料を必要としています。主は、「祈り」と「断食」によって私たちの信仰が養われると言われました。主を礼拝する生活を大切にしましょう。時には一食や二食の食を断ってでも祈りに集中してみたら何かが変わるはずですよ。主イエスがどんな山も動かして下さることを信じて。

（記 村上修平）